

## 2016（平成28）年における事業概要

感染症発生動向調査事業は、大阪府内の医療機関等の協力のもと、昭和57年から大阪府と大阪市において実施しており、平成11年からは堺市と東大阪市、平成15年からは高槻市、平成24年からは豊中市、平成26年からは枚方市においても実施され、現在、7自治体が協力して本事業を行っている。

「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律」（以下「感染症法」という。）では、一類から五類感染症（全数把握と定点把握）、新型インフルエンザ等感染症及び指定感染症の112感染症を対象感染症とし、情報の収集、分析、提供・公開を行っている。

本事業で定点把握対象の五類感染症の発生状況を届け出る「指定届出機関（定点）」は、インフルエンザ定点、小児科定点、眼科定点、STD定点および基幹定点からなっている。また、平成20年4月1日より感染症法第14条第1項に規定する厚生労働省令で定める疑似症について、疑似症定点からの報告を受けている。

平成28年12月末の指定数は、インフルエンザ定点308、小児科定点200、眼科定点52、STD定点67、基幹定点18、疑似症定点474である。

### 1 患者情報の収集

ファクシミリ等の活用により、医療機関からの患者情報を、全数把握対象感染症は直ちに（五類感染症にあつては7日以内に）、定点把握対象感染症は週報（一部月報）で収集している。さらに、収集した情報はコンピュータオンラインシステムにより国立感染症研究所（中央感染症情報センター）に報告している。

### 2 情報の解析・評価

学識経験者、医療関係団体・医療施設等の代表者、関係行政機関の職員等により構成される感染症発生動向調査に係る委員会において、収集した情報の解析・評価を行っている。

### 3 情報の提供・公開

大阪府は、委員会から報告された情報を全国情報と併せて週報とし、各定点医療機関、一般社団法人大阪府医師会、保健所、各市町村及び学校等関係機関に広く情報を提供して

いる。また、大阪府感染症情報センターのホームページにも感染症情報を掲載している。

#### 4 病原体情報の収集

患者定点の中から病原体定点を選定し、これらの病原体定点から提供される検体についてウイルス検査、細菌検査を地方衛生研究所において行っている。併せて病院等が行った検査の情報収集を図っている。

## 5 類定点把握感染症(性感染症を除く)

## 1. 2016(平成28)年のまとめ

2016(平成28)年の大阪府感染症発生動向調査事業における5類定点把握感染症(性感染症を除く)の特徴について概説する(表)。全国では、定点あたりの年平均の週間報告数として、インフルエンザ、感染性胃腸炎、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、流行性耳下腺炎、マイコプラズマ肺炎、ヘルパンギーナ、流行性角結膜炎の順であった。大阪府では、感染性胃腸炎、インフルエンザ、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、流行性耳下腺炎、マイコプラズマ肺炎、ヘルパンギーナ、RSウイルス感染症の順であり、全国の発生動向や傾向と若干の相違が認められている。

大阪府の発生動向について、2015(平成27)年と比較すると、インフルエンザの年平均の週間報告数が3.29から6.06へ、昨年より、84.2%の増加が見られた。また、流行性耳下腺炎が0.35から1.39へ著しく増加していた。マイコプラズマ肺炎が、0.71から1.24へ増加していた。ヘルパンギーナの週間報告数は、0.48から0.82へ増加していた。一方、昨年、平均週間報告数が2.60であった手足口病が2016年は0.26へと、90%激減していた。

表. 定点あたり年平均の週間報告数

全 国			大 阪 府		
順位	感染症	定点当たり報告数	順位	感染症	定点当たり報告数
1	インフルエンザ	6.82	1	感染性胃腸炎	7.15
2	感染性胃腸炎	6.81	2	インフルエンザ	6.06
3	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	2.24	3	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	2.08
4	流行性耳下腺炎	0.97	4	流行性耳下腺炎	1.39
5	マイコプラズマ肺炎	0.80	5	マイコプラズマ肺炎	1.24
6	ヘルパンギーナ	0.79	6	ヘルパンギーナ	0.82
7	流行性角結膜炎	0.73	7	RSウイルス感染症	0.82

(文責：本村)

### 1) 2016 (平成28) 年に注目された感染症

#### [麻しん]

○ 2016 (平成28) 年、日本で159例、大阪府内で51例の麻しんの報告例があり、(詳細については五類全数把握感染症の項に記してあるので、ご参照ください) 日本全体の32.1%を占めた。

麻しんの発生動向・報告数 (日本、大阪府)

	日 本	大 阪 府	府の発生割合
2016 年	159 人	51 人	32.1%
2015 年	35 人	2 人	5.7%
2014 年	462 人	45 人	9.7%

その中で、関西国際空港内事業所での麻しん集団感染事例は、報道等でも大きく取り上げられ世間の関心を集めたことは記憶に新しい。ここでは、集団感染事例 (33名) の概要について述べてみたい。なお、事例の詳細についてはIASR Vol. 38 p.48-49: 2017年3月号「関西国際空港内事業所での麻疹集団感染事例について」をご参照いただきたい。

2016年8月から9月に発生した関西国際空港内事業所での麻しん集団感染事例は、2015年3月27日、日本が世界保健機関 (WHO) 西太平洋地域事務局により麻しん排除状態にあると認定後、初めて同一施設内における成人での集団発生となった。図1に初発例の発症日をX日とする流行曲線と感染症発生動向調査 (NESID) 上の病型を示す。また発症時の年齢分布と病型は図2のとおりである。

図1) 流行曲線と NESID による病型

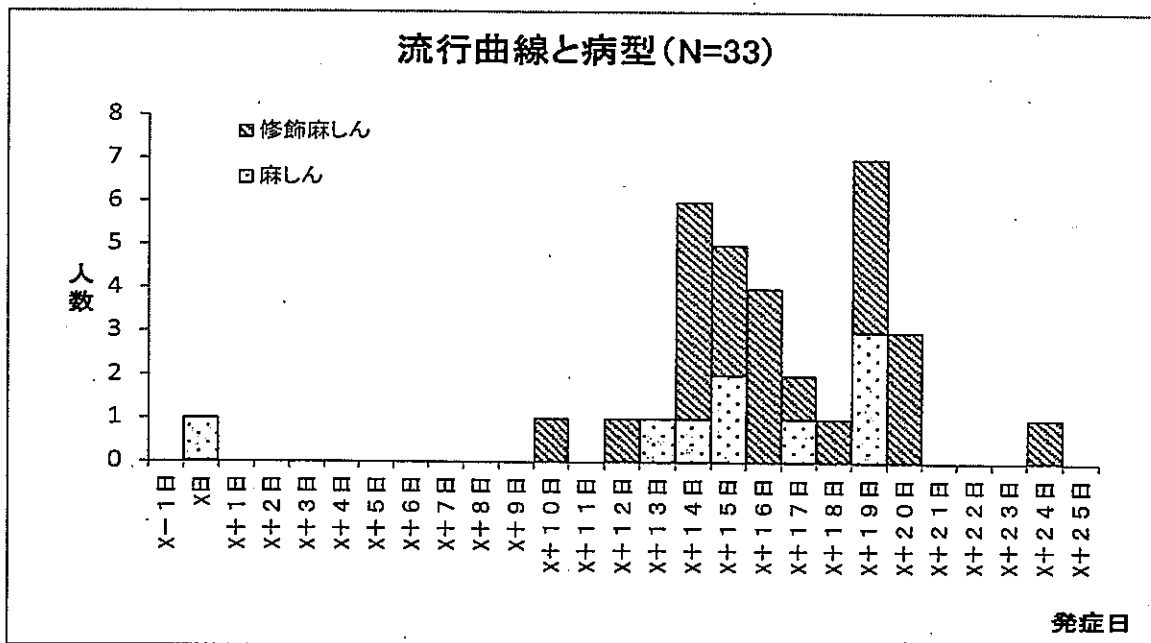
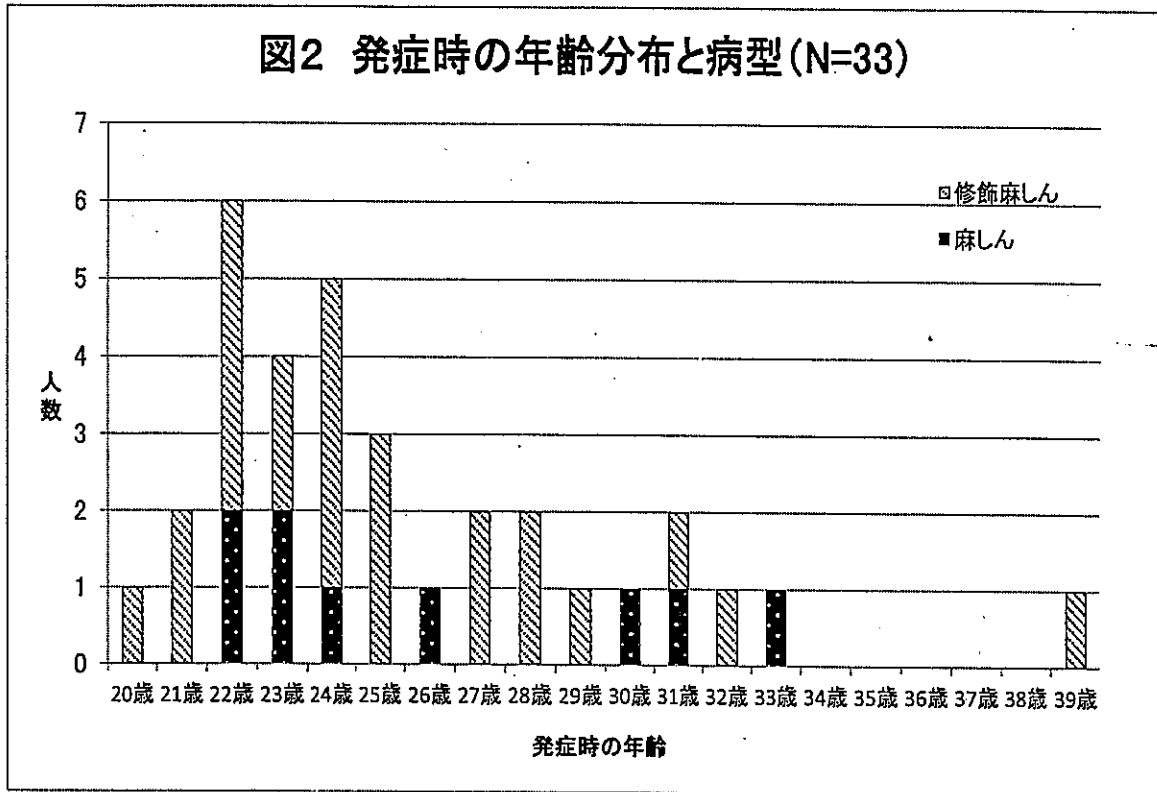


図2) 発症時の年齢分布と NESID による病型



これらのことから、初発例と最終の発病者を除くと発症者はX+10日からX+20日の11日間に集中したことや20代から30代前半を中心に若い世代に発生したこと、病型として修飾麻しんが72.7%を占めたことがわかる。

遺伝子型について述べると、33名中29名に同じ麻しんウイルスの遺伝子型HIがみられ、29名のN遺伝子中の遺伝子型決定部位450塩基の配列は一致していた。また、予防接種歴は33名中の31名(93.9%)について国立感染症研究所の実地疫学専門家養成コース研修員(FETP)による聞き取り調査に協力が得られた。その調査記録によると14名(45.2%)の方が麻しん含有ワクチンを2回接種していることが判明している。その内、13名が修飾麻しんを呈したことがわかった。

この事例から考える対策は、第一には、2回の麻しん・風しん(MR)ワクチン接種を受けること、第二に、2回のワクチン接種率をそれぞれ95%以上にして集団免疫を高めておくこと、それ以外には、患者をできるだけ早期に確実に診断すること、その接触者の健康観察を確実に行うこと、有症状者は休業すること、また海外渡航者が多数往来する施設の従事者や流行地へ海外渡航する人たちは2回のワクチン接種を確実に受けておくことなどがあげられる。

(文責：木下)

[梅毒]

ペニシリン導入後、罹患率は著明に低下していたが、米国では21世紀初頭より増加傾向に転じ<sup>1)</sup>、本邦でも2010(平成22)年以後急激な増加を示している。当初男性同性愛者において顕著であったが、最近では男女の異性間接触例でも増加しており、新生児梅毒の増加も社会的脅威となっている<sup>2)</sup>。

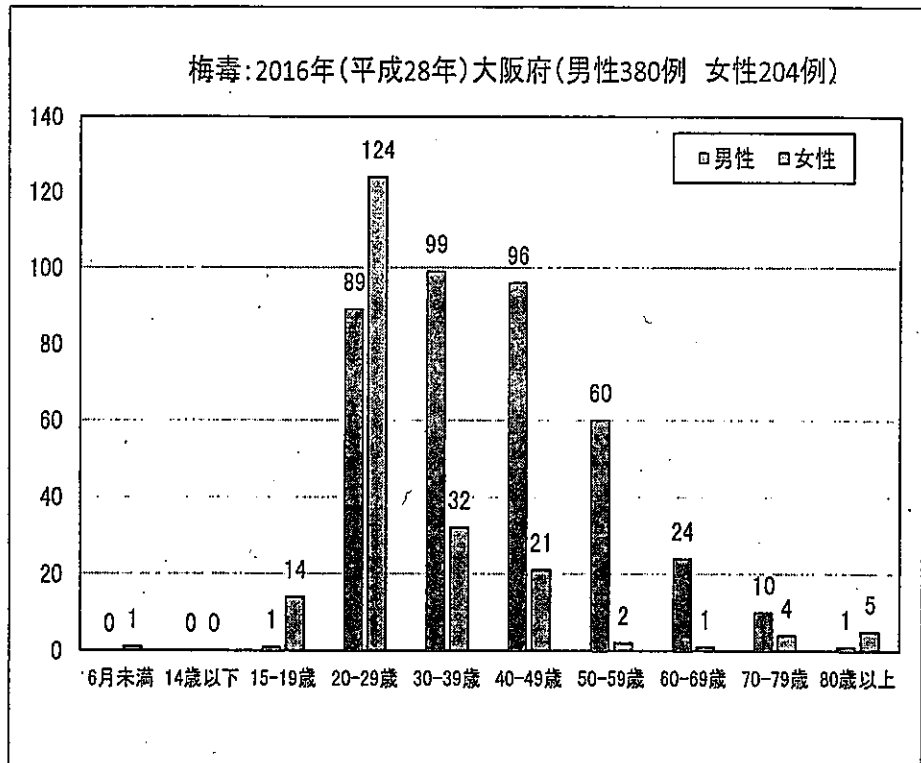
本稿では大阪府の現況報告をする。2014(平成26)年男性215例(前年比+52.5%)、女性25例(前年比+56.3%)、2015(平成27)年男性239例(前年比+11.2%)、女性83例(前年比+232.0%)、2016(平成28)年男性380例(前年比+59.0%)、女性204例(前年比+145.8%)と、特に女性に著明な増加を認めた。季節的変動に関しては①1-3月期:男81例、女35例 ②4-6月期:男96例、女52例 ③7-9月期:男115例、女65例 ④10-12月期:男88例、女52例と夏季に多かった。

地域別では⑩大阪市東部215例(36.8%)、⑧大阪市北部188例(32.2%)と2地域で全体の69.0%を占めた。他域での報告数は1地域あたり11-36例にとどまっていた。性別でも前記2地域で男性250例(65.8%)、同女性153例(75.0%)と大半を占めた。

年齢別(図)は全体で、6ヶ月未満1例(0.2%)、6ヶ月以上-14歳0例、15-19歳15例(2.7%)、20-29歳213例(36.5%)、30-39歳131例(22.4%)、40-49歳117例(20.0%)、50-59歳62例(10.6%)、60-69歳25例(4.3%)、70-79歳14例(2.4%)、80歳以上6例(1.0%)であった。

女性では20歳台が124例(60.7%)と多数を占め、男性では20歳台89例、30歳台99例、40歳台96例となだらかなpeakを形成しており、20-49歳で74.7%を占めた。新生児1例を含む未成年例が全体の2.7%、

特に10歳代では男1例、女14例と男女差が際立っていた。60歳以上の高齢者においても7.7%認めた。



治療奏功の判定には血清抗体価低下の確認が必須であるが3)、過去の自験56例中16例(28.6%)において治療開始後の抗体価測定未施行であり、治療後抗体価測定意義に対する十分な説明が重要であると考えます。

1) Kent ME, Romanelli F. Reexamining Syphilis : An Update on Epidemiology, Clinical Manifestation, and Management. The annals of Pharmacotherapy 42 : 226-236, 2008.

2) IDWR, 18(12):7-8, 注目すべき感染症「梅毒」

<http://www0.nih.go.jp/niid/idsc/idwr/IDWR2016/idwr2016-12.pdf>

3) 性感染症 診断・治療 ガイドライン 2016。日本性感染症学会 27 (1 Supplement) :46-50,

<http://jssti.umin.jp/pdf/guideline-2016.pdf>

(文責 亀岡)

## 2) 感染症別・週別患者報告状況

夏型感染症（咽頭結膜熱、手足口病、ヘルパンギーナ等）や冬型感染症（インフルエンザ、感染性胃腸炎、RSウイルス感染症等）に分類される。「2016（平成28）年の総括」で記した疾患について、定点当たり報告数の最高値が報告された週や最高値を示した（表1）。インフルエンザは、2015（平成27）年と比較して4週遅く、2月第2週に最高値を示した。一方、マイコプラズマ肺炎は、2015（平成27）年と比較して9週早く、10月第3週に、RSウイルス感染症は、2015（平成27）年と比較して7週早く、10月第3週に最高値を示した。

感染性胃腸炎、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は、2015（平成27）年とほぼ同時期に、最高値が報告された。

表1. 定点あたり報告数の最高値が報告された週や最高値(2016年)

### 大 阪 府

	疾患	定点当たり報告数の最高値が報告された週	定点当たり報告数の最高値	警報レベル開始基準値
1	インフルエンザ	6週(2月第2週)	41.28	30
2	感染性胃腸炎	50週(12月第2週)	21.25	20
3	ヘルパンギーナ	28週(7月第2週)	5.96	6
4	マイコプラズマ肺炎	42週(10月第3週)	3.29	未設定
5	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	21週(5月第4週)	3.19	8
6	RSウイルス感染症	42週(10月第3週)	2.90	未設定
7	流行性耳下腺炎	42週(10月第3週)	2.57	6

された。

2016（平成28）年と2015（平成27）年における感染症発生動向の増減を比較すると、2016（平成28）年は、インフルエンザ、咽頭結膜熱、感染性胃腸炎、ヘルパンギーナ、流行性耳下腺炎、流行性角結膜炎、マイコプラズマ肺炎、感染性胃腸炎（ロタウイルス）が増加傾向を示していた。特に、増減率をみると、流行性耳下腺炎は2015（平成27）年に比べ3.86倍に増え、インフルエンザは1.81倍、マイコプラズマ肺炎は1.71倍、ヘルパンギーナが1.71倍であった。流行性耳下腺炎、マイコプラズマ肺炎は、流行した2015（平成27）年を超えて、大流行した。

(文責：本村)

疾患	2016年	2015年
インフルエンザ ↑	96,701	53,678
RSウイルス感染症 ↓	8,542	10,596
咽頭結膜熱 ↑	5,231	4,640
A群溶血性レンサ球菌咽頭炎 ↓	21,607	23,081
感染性胃腸炎 ↑	74,465	63,584
水痘 ↓	4,254	5,534
手足口病 ↓	2,689	27,500
伝染性紅斑 ↓	1,998	5,409
突発性発しん ↓	4,857	5,491
百日咳 ↓	166	219
ヘルパンギーナ ↑	8,563	5,096
流行性耳下腺炎 ↑	14,504	3,761
小児科定点疾患 合計	243,577	208,589
急性出血性結膜炎 ↓	31	42
流行性角結膜炎 ↑	1,454	1,053
眼科定点疾患 合計	1485	1095
細菌性髄膜炎 ↑	29	16
無菌性髄膜炎 ↑	59	35
マイコプラズマ肺炎 ↑	1,097	640
クラミジア肺炎(オウム病を除く) ↓	4	9
感染性胃腸炎(ロタウイルス) ↑	405	293
基幹定点疾患 合計	1594	993



## 3) 感染症別・ブロック別患者報告状況

大阪府内を11ブロック(1.豊能、2.三島、3.北河内、4.中河内、5.南河内、6.堺市、7.泉州、8.大阪市北部、9.大阪市西部、10.大阪市東部、11.大阪市南部)に分け、各ブロックの構成市町村、定点数、人口、出生数を解析評価した。

感染症別に、1年間でより流行が認められた地域を定点当たりの年平均報告数を表に要約した。年平均の定点当たり報告数から地域ブロックを評価した場合、上位8疾患のうち、南河内は3疾患(感染性胃腸炎、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、流行性耳下腺炎)で首位を占めていた(表)。一方、三島ブロックは4疾患(インフルエンザ、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症、咽頭結膜熱)で、最下位であった。

表. 感染症別・ブロック別患者報告状況(太字は最高ブロックと報告数)

インフルエンザ		感染性胃腸炎		A群溶血性レンサ球菌咽頭炎		流行性耳下腺炎	
豊能	5.04	豊能	5.86	豊能	2.13	豊能	0.59
三島	4.42	三島	5.66	三島	0.96	三島	1.19
北河内	6.18	北河内	8.60	北河内	2.26	北河内	1.37
中河内	6.11	中河内	11.35	中河内	2.83	中河内	1.72
南河内	8.55	南河内	11.39	南河内	3.33	南河内	2.47
堺市	5.95	堺市	3.56	堺市	1.22	堺市	0.89
泉州	6.20	泉州	8.14	泉州	2.19	泉州	2.23
大阪市北部	6.67	大阪市北部	7.11	大阪市北部	2.05	大阪市北部	2.21
大阪市西部	8.88	大阪市西部	6.68	大阪市西部	2.08	大阪市西部	0.90
大阪市東部	5.39	大阪市東部	3.98	大阪市東部	1.09	大阪市東部	0.85
大阪市南部	4.91	大阪市南部	5.09	大阪市南部	2.40	大阪市南部	0.89
府内平均	6.06	合計	7.15	合計	2.08	合計	1.39

ヘルパンギーナ		RSウイルス感染症		咽頭結膜熱		突発性発しん	
豊能	0.68	豊能	0.65	豊能	0.34	豊能	0.41
三島	0.64	三島	0.35	三島	0.26	三島	0.31
北河内	1.12	北河内	1.03	北河内	0.73	北河内	0.60
中河内	0.95	中河内	0.93	中河内	1.10	中河内	0.67
南河内	0.97	南河内	1.36	南河内	0.49	南河内	0.54
堺市	0.71	堺市	0.54	堺市	0.26	堺市	0.24
泉州	0.89	泉州	0.69	泉州	0.40	泉州	0.59
大阪市北部	1.10	大阪市北部	1.40	大阪市北部	0.41	大阪市北部	0.55
大阪市西部	0.74	大阪市西部	1.25	大阪市西部	0.49	大阪市西部	0.39
大阪市東部	0.42	大阪市東部	0.54	大阪市東部	0.53	大阪市東部	0.34
大阪市南部	0.64	大阪市南部	0.56	大阪市南部	0.39	大阪市南部	0.35
合計	0.82	合計	0.82	合計	0.50	合計	0.47

(文責:本村)

#### 4) 感染症別・年齢別患者報告状況

インフルエンザ定点、基幹定点を除いた小児科定点における年齢報告数で最も多かった年齢は1歳台、次いで2歳台、4歳台、3歳台、5歳台の順であった。1歳台の報告数の多い疾患は、感染性胃腸炎、RSウイルス感染症、突発性発しん、ヘルパンギーナ、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎であった。2歳台の報告数の多い疾患は、感染性胃腸炎、ヘルパンギーナ、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症、流行性耳下腺炎であった。3歳台の報告数の多い疾患は、感染性胃腸炎、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、流行性耳下腺炎、ヘルパンギーナ、咽頭結膜熱であった。

2016（平成28）年は、2015（平成27）年と比べ、手足口病の報告数が少なくなったため、今回の年齢別患者報告状況で、検出されていない。インフルエンザは、小児科定点に加え、内科定点医療機関からも報告されるため、20歳以上の報告数が最多で、次が10歳から14歳台であった。小学校、中学校、職場など、集団生活を送る世代に多い疾患である。眼科定点疾患の流行性角結膜炎は2歳台が多く、基幹定点疾患のマイコプラズマ肺炎は、10歳から14歳台が好発年齢であった。インフルエンザを除くと、どの年代でも感染性胃腸炎が多く報告されていた。

表. 定点あたり報告数の最高値が報告された年齢区分

大阪府	
疾患名	最高値が報告された年齢区分
インフルエンザ	20歳以上
RSウイルス感染症	1歳台
咽頭結膜熱	1歳台
A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	5歳台
感染性胃腸炎	1歳台
水痘	4-5歳台
手足口病	1歳台
伝染性紅斑	5歳台
突発性発しん	1歳台
百日咳	6か月未満
ヘルパンギーナ	1歳台
流行性耳下腺炎	5歳台
急性出血性結膜炎	20歳以上
流行性角結膜炎	20歳以上
マイコプラズマ肺炎	5歳台
感染性胃腸炎(ロタウイルス)	1歳台

(文責：本村)

## 2016年(平成28年)感染症発生動向調査 カレンダー

調査期間は月曜日から日曜日までの1週間を単位としています。

	週	調査期間		週	調査期間		週	調査期間
1月	1週	1/4 ~ 1/10	5月	18週	5/2 ~ 5/8	9月	36週	9/5 ~ 9/11
	2週	1/11 ~ 1/17		19週	5/9 ~ 5/15		37週	9/12 ~ 9/18
	3週	1/18 ~ 1/24		20週	5/16 ~ 5/22		38週	9/19 ~ 9/25
	4週	1/25 ~ 1/31		21週	5/23 ~ 5/29		39週	9/26 ~ 10/2
2月	5週	2/1 ~ 2/7		22週	5/30 ~ 6/5	10月	40週	10/3 ~ 10/9
	6週	2/8 ~ 2/14	6月	23週	6/6 ~ 6/12		41週	10/10 ~ 10/16
	7週	2/15 ~ 2/21		24週	6/13 ~ 6/19		42週	10/17 ~ 10/23
	8週	2/22 ~ 2/28		25週	6/20 ~ 6/26		43週	10/24 ~ 10/30
	9週	2/29 ~ 3/6		26週	6/27 ~ 7/3		44週	10/31 ~ 11/6
3月	10週	3/7 ~ 3/13		7月	27週	7/4 ~ 7/10	11月	45週
	11週	3/14 ~ 3/20	28週		7/11 ~ 7/17	46週		11/14 ~ 11/20
	12週	3/21 ~ 3/27	29週		7/18 ~ 7/24	47週		11/21 ~ 11/27
	13週	3/28 ~ 4/3	30週		7/25 ~ 7/31	48週		11/28 ~ 12/4
4月	14週	4/4 ~ 4/10	8月	31週	8/1 ~ 8/7	12月	49週	12/5 ~ 12/11
	15週	4/11 ~ 4/17		32週	8/8 ~ 8/14		50週	12/12 ~ 12/18
	16週	4/18 ~ 4/24		33週	8/15 ~ 8/21		51週	12/19 ~ 12/25
	17週	4/25 ~ 5/1		34週	8/22 ~ 8/28		52週	12/26 ~ 1/1
				35週	8/29 ~ 9/4			

2016年(平成28年)年平均の定点あたり報告数上位5疾患(大阪府内)

	1位	2位	3位	4位	5位	TOPICS
1週	感染性胃腸炎 1234	A群溶連菌咽頭炎 353	RSウイルス感染症 349	水痘 190	流行性耳下腺炎 183	インフルエンザ 流行期に入る
2	感染性胃腸炎 1132	A群溶連菌咽頭炎 334	RSウイルス感染症 179	流行性耳下腺炎 145	伝染性紅斑 122	インフルエンザ 流行続く
3	感染性胃腸炎 1358	A群溶連菌咽頭炎 470	RSウイルス感染症 173	伝染性紅斑 129	流行性耳下腺炎 96	インフルエンザ さらに増加
4	感染性胃腸炎 1256	A群溶連菌咽頭炎 564	流行性耳下腺炎 129	伝染性紅斑 128	RSウイルス感染症 121	インフルエンザ 注意報レベル超える
5	感染性胃腸炎 1263	A群溶連菌咽頭炎 563	流行性耳下腺炎 150	RSウイルス感染症 112	伝染性紅斑 85	インフルエンザ 警報レベル超える
6	感染性胃腸炎 1138	A群溶連菌咽頭炎 557	流行性耳下腺炎 129	水痘 89	伝染性紅斑 79	インフルエンザ 流行拡大
7	感染性胃腸炎 1208	A群溶連菌咽頭炎 481	流行性耳下腺炎 158	水痘 85	伝染性紅斑 79	インフルエンザ 警報レベル続く
8	感染性胃腸炎 1275	A群溶連菌咽頭炎 456	流行性耳下腺炎 161	伝染性紅斑 85	突発性発疹 82	インフルエンザ 流行続くも減少傾向
9	感染性胃腸炎 1409	A群溶連菌咽頭炎 452	流行性耳下腺炎 145	水痘 82	伝染性紅斑 72	インフルエンザ ピーク越え
10	感染性胃腸炎 1553	A群溶連菌咽頭炎 457	流行性耳下腺炎 191	突発性発疹 78	水痘 61	インフルエンザ 減少
11	感染性胃腸炎 1516	A群溶連菌咽頭炎 409	流行性耳下腺炎 149	突発性発疹 66	伝染性紅斑 63	インフルエンザ さらに減少
12	感染性胃腸炎 1229	A群溶連菌咽頭炎 358	流行性耳下腺炎 169	突発性発疹 73	水痘 71	インフルエンザ 減少続く
13	感染性胃腸炎 1618	A群溶連菌咽頭炎 301	流行性耳下腺炎 173	突発性発疹 80	水痘 64	感染性胃腸炎 増加
14	感染性胃腸炎 1427	A群溶連菌咽頭炎 313	流行性耳下腺炎 160	突発性発疹 82	水痘 54	インフルエンザ 終息へ
15	感染性胃腸炎 1589	A群溶連菌咽頭炎 367	流行性耳下腺炎 184	突発性発疹 96	水痘 66	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎 増加
16	感染性胃腸炎 1745	A群溶連菌咽頭炎 463	流行性耳下腺炎 167	突発性発疹 100	水痘 78	感染性胃腸炎 増加
17	感染性胃腸炎 1624	A群溶連菌咽頭炎 425	流行性耳下腺炎 175	突発性発疹 104	咽頭結膜熱 92	インフルエンザ 終息か
18	感染性胃腸炎 1075	A群溶連菌咽頭炎 361	流行性耳下腺炎 204	咽頭結膜熱 99	水痘 93	
19	感染性胃腸炎 1426	A群溶連菌咽頭炎 524	流行性耳下腺炎 223	咽頭結膜熱 142	水痘 137	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎 増加
20	感染性胃腸炎 1559	A群溶連菌咽頭炎 631	流行性耳下腺炎 245	咽頭結膜熱 143	突発性発疹 113	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎 増加続く
21	感染性胃腸炎 1611	A群溶連菌咽頭炎 635	流行性耳下腺炎 255	咽頭結膜熱 174	突発性発疹 149	流行性耳下腺炎 増加
22	感染性胃腸炎 1334	A群溶連菌咽頭炎 594	流行性耳下腺炎 310	咽頭結膜熱 185	ヘルパンギーナ 180	流行性耳下腺炎 さらに増加
23	感染性胃腸炎 1496	A群溶連菌咽頭炎 616	ヘルパンギーナ 278	流行性耳下腺炎 240	咽頭結膜熱 189	ヘルパンギーナ 増加
24	感染性胃腸炎 1414	A群溶連菌咽頭炎 609	ヘルパンギーナ 461	流行性耳下腺炎 309	咽頭結膜熱 167	ヘルパンギーナ さらに増加
25	感染性胃腸炎 1249	ヘルパンギーナ 695	A群溶連菌咽頭炎 538	流行性耳下腺炎 345	咽頭結膜熱 173	ヘルパンギーナ 増加続く
26	感染性胃腸炎 1139	ヘルパンギーナ 948	A群溶連菌咽頭炎 548	流行性耳下腺炎 329	咽頭結膜熱 127	ヘルパンギーナ さらに増加
27	ヘルパンギーナ 1161	感染性胃腸炎 994	A群溶連菌咽頭炎 530	流行性耳下腺炎 355	突発性発疹 107	ヘルパンギーナ 第1位に
28	ヘルパンギーナ 1187	感染性胃腸炎 901	A群溶連菌咽頭炎 480	流行性耳下腺炎 436	突発性発疹 108	流行性耳下腺炎 増加
29	ヘルパンギーナ 831	感染性胃腸炎 747	流行性耳下腺炎 401	A群溶連菌咽頭炎 344	突発性発疹 98	ヘルパンギーナ 減少
30	感染性胃腸炎 854	ヘルパンギーナ 630	流行性耳下腺炎 445	A群溶連菌咽頭炎 344	突発性発疹 120	流行性耳下腺炎 増加
31	感染性胃腸炎 752	ヘルパンギーナ 418	流行性耳下腺炎 394	A群溶連菌咽頭炎 317	突発性発疹 116	流行性耳下腺炎 流行続く
32	感染性胃腸炎 555	流行性耳下腺炎 356	ヘルパンギーナ 244	A群溶連菌咽頭炎 209	咽頭結膜熱 99	ヘルパンギーナ 減少続く
33	感染性胃腸炎 612	流行性耳下腺炎 382	A群溶連菌咽頭炎 184	ヘルパンギーナ 156	RSウイルス感染症 132	RSウイルス感染症 増加の兆し
34	感染性胃腸炎 780	流行性耳下腺炎 360	A群溶連菌咽頭炎 239	ヘルパンギーナ 148	RSウイルス感染症 112	麻疹 集団発生
35	感染性胃腸炎 806	流行性耳下腺炎 319	A群溶連菌咽頭炎 260	RSウイルス感染症 190	ヘルパンギーナ 142	麻疹 流行拡大
36	感染性胃腸炎 776	流行性耳下腺炎 330	A群溶連菌咽頭炎 311	RSウイルス感染症 237	突発性発疹 130	麻疹 さらに感染拡大
37	感染性胃腸炎 678	A群溶連菌咽頭炎 384	流行性耳下腺炎 303	RSウイルス感染症 248	咽頭結膜熱 106	RSウイルス感染症 増加
38	感染性胃腸炎 589	流行性耳下腺炎 337	A群溶連菌咽頭炎 319	RSウイルス感染症 253	手足口病 87	流行性耳下腺炎 増加
39	感染性胃腸炎 726	流行性耳下腺炎 418	RSウイルス感染症 349	A群溶連菌咽頭炎 317	手足口病 122	流行性耳下腺炎 さらに増加
40	感染性胃腸炎 708	RSウイルス感染症 559	流行性耳下腺炎 387	A群溶連菌咽頭炎 287	手足口病 233	RSウイルス感染症 増加
41	感染性胃腸炎 707	RSウイルス感染症 553	流行性耳下腺炎 357	A群溶連菌咽頭炎 232	手足口病 152	RSウイルス感染症 流行続く
42	感染性胃腸炎 856	RSウイルス感染症 579	流行性耳下腺炎 513	A群溶連菌咽頭炎 317	手足口病 131	流行性耳下腺炎 再び増加
43	感染性胃腸炎 1011	RSウイルス感染症 434	流行性耳下腺炎 365	A群溶連菌咽頭炎 318	手足口病 109	感染性胃腸炎 増加
44	感染性胃腸炎 1325	RSウイルス感染症 386	流行性耳下腺炎 346	A群溶連菌咽頭炎 333	手足口病 118	感染性胃腸炎 増加続く
45	感染性胃腸炎 1912	A群溶連菌咽頭炎 448	流行性耳下腺炎 395	RSウイルス感染症 384	突発性発疹 94	感染性胃腸炎 さらに増加
46	感染性胃腸炎 2671	A群溶連菌咽頭炎 401	流行性耳下腺炎 332	RSウイルス感染症 331	手足口病 108	インフルエンザ 流行迫る
47	感染性胃腸炎 2587	A群溶連菌咽頭炎 393	RSウイルス感染症 383	流行性耳下腺炎 350	水痘 129	インフルエンザ 流行期に入る
48	感染性胃腸炎 3552	A群溶連菌咽頭炎 432	流行性耳下腺炎 366	RSウイルス感染症 334	咽頭結膜熱 131	感染性胃腸炎 増加
49	感染性胃腸炎 3927	A群溶連菌咽頭炎 490	RSウイルス感染症 303	流行性耳下腺炎 284	咽頭結膜熱 135	感染性胃腸炎 警報レベルに迫る
50	感染性胃腸炎 4271	A群溶連菌咽頭炎 497	流行性耳下腺炎 316	RSウイルス感染症 270	咽頭結膜熱 167	感染性胃腸炎 警報レベル超える
51	感染性胃腸炎 3256	A群溶連菌咽頭炎 414	RSウイルス感染症 251	流行性耳下腺炎 239	咽頭結膜熱 147	感染性胃腸炎 ピーク越えか
52	感染性胃腸炎 1527	A群溶連菌咽頭炎 257	RSウイルス感染症 193	流行性耳下腺炎 189	水痘 103	インフルエンザ 増加

注1:疾患名は小児科定点の対象疾患です。 注2:週遅れデータは含まれていません。  
注3:A群溶血性レンサ球菌咽頭炎はA群溶連菌咽頭炎と表示しています。

